

ちゅきちゅき♡おっとりダーリン特典SS／田鶴都のちゅきちゅき♡メモリアル

夏の太陽が燦々と輝き、アスファルトを焼いている。今年も猛暑で、週末にも関わらず昼すぎのこの時間には通りを歩く人の姿さえまばらだった。

祖父から譲り受けた古い建物をリノベーションして古書店を開いたのが数年前。

細々とでも食べていけるせいか、大好きな本に囲まれているせいか……いま以上の欲や希望といったものはすっかりなくなってしまった。

まだ若いのにもったいないなんて言われるけれど、隠者のような生活もそう悪くはない。読みかけていた本を開いて活字の上に再び目を落とした時、生ぬるい熱気が吹き込んできて、お客さんが来たのがわかった。

「今日はとっても暑いですねえ。うちは立ち読み歓迎なんです。涼んでいってくださいね」顔も上げずに、適当な言葉をかける。特に返事は求めていない。

ここは本と出会う場所。できるだけ僕が存在を気にせずに、自由に過ごしてもらいたい。

(……何より僕も、今いいところに差し掛かっているしね)

黙々と文字を読んではページをめくり、また左端から目線を動かして――。

古びた文庫本を読み終わって本を閉じた時、「あの」と声をかけられた。

「え……」

驚いて顔を上げると、女性がおずおずとカウンターに本を置く。

「わ、ごめんなさい。気がつかなくて……!」

お客さんの存在をすっかり忘れていた。

「集中しているみたいだったので」と彼女は少し困ったように笑い、そのうえ「お邪魔しですみません」と謝ってくる。

正直に言って、自分がお客さんの存在を忘れてしまうのは日常茶飯事だった。

もっと正直に言くと、それを深刻に受け止めたことがない。

だけど今回に限っては、なぜか胸がぎゅっと締めつけられた。

(なぜか? ……なぜだろう)

自分の感覚を持て余しながら、彼女の本を紙袋に入れようとする。

すぐに読むからと言われて、剥き出しのままの本を彼女に手渡して、僕は代金を受け取った。

「まだまだ暑いから、帰り道も気をつけてくださいね」

そう言って彼女を送り出そうとした時、防災無線で光化学スモッグ注意報の発令を知らせるアナウンスが流れだした。

彼女が暑さの中に戻るのを嫌がるように、少しだけ眉を寄せる。

その仕草にまた胸がぎゅっとして――やはり理由もわからないまま、口を開いていた。

「やっぱり帰らないでください」

彼女が目を丸くして、「えっ?」と聞き返してくる。

僕はカウンター脇に置いた古い椅子の上から古本の束をどかして、ぱんぱんと座布団のほこりを払う。

「日が落ちるまで、ここにいてください。今日は他にお客さんいませんし……ね？」

彼女は戸惑っている様子だった。

「ほら、今は昼過ぎで一番暑いときでしょう？ 今日の日入りまで、あとたったの五、六時間くらいです。本を読むのにも、ただぼうつと過ごすのにもびったりですから……ねっ？」

彼女は固まっていたが、太陽の照りつける通りと椅子とを見比べる。

そして、「なら少しだけ」とぎくしゃくとした動きで椅子に腰を下ろした。

彼女がそこに座って本を開いたとき、僕は気づいた。

（この風景だ）

このひとに、ここにいてほしい。

何かが足りていないなんて思ったこともなかったのに、彼女がいると何もかもがしつくりくる。優れた作家の書いた文章のように、何もかもに納得させられてしまう。名前のつけられない感覚に言葉が与えられた瞬間と同じ、ためいきが漏れた。

（恋に落ちるって……こういうことなんだ）

圧倒され、打たれて、ぼんやりとしながら、僕は今日二冊目になる本を膝に乗せた。

ただどうしても開く気になれなくて、視界に映る彼女を見るともなしに見てしまう。

彼女の指先がページをめくる時の紙が擦れる音。本に顔を埋めるようになった姿勢を直す時の、ちょっとした動き。すべてが愛おしい。なんなら本のページをめくってあげたいし、うちわであおいであげたいし、冷たい麦茶を唇まで運んであげたい。

それでも何もできないまま、彼女を読むように、ただ見つめて――。

ふと、彼女を「彼女」としか呼べない自分に気づく。

（名前……）

だけど今や彼女は、本に集中し始めていた。邪魔をするのがはばかりれて、声をかけられない。奇しくも先ほどの彼女と同じ心地を味わっていた。

名前を聞けるのは、彼女が本を閉じ、椅子を立ててこの店から帰る時。

（名前を聞いたら、明日も、明後日も、明々後日も……ううん、ただまたいらしてくださいって……それだけ、でも……）

気づけば、涼しい店内にいるのに、じつとりと手のひらが汗ばんでいた。

欲望と邪念が自らの内にシツカリと残っていたことに気づかされるまで、あと数分。想い人の訪れを待っただけの恋わずらいの日は、こうして静かに始まった。